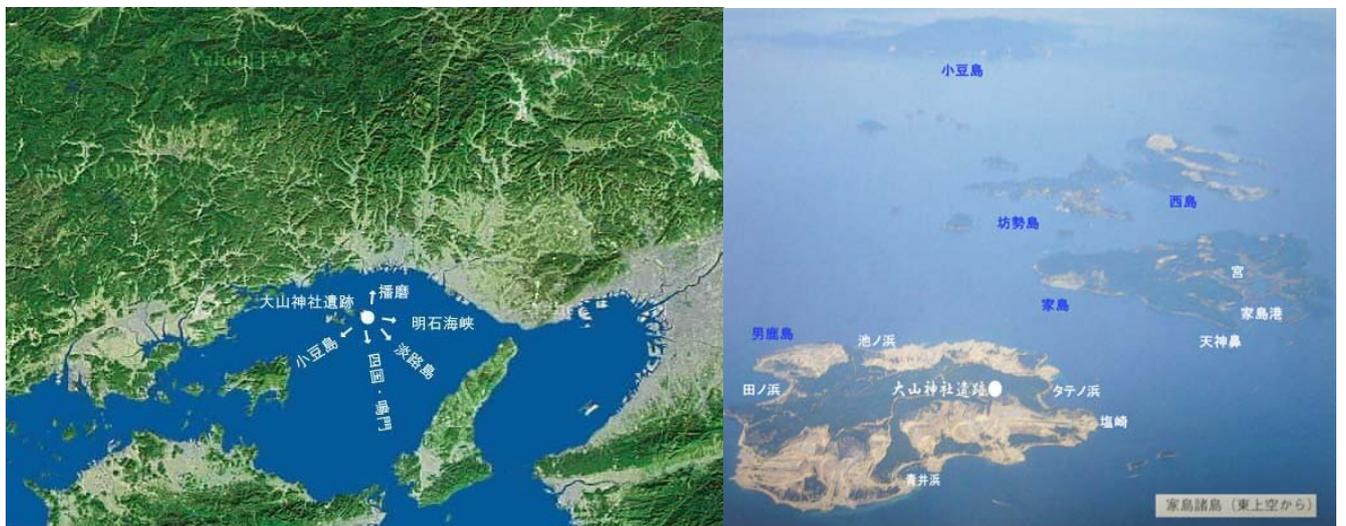


弥生の高地性集落 「男鹿島 大山神社遺跡」を訪ねて

2006.8.1.&8.4.



姫路市飾磨港から高速船で約 30 分 播磨灘の真ん中にぽっかり浮かぶ家島諸島がある。

東から男鹿島（たんがじま）・家島本島（いえしま）・坊勢（ぼうぜじま）・西島（にしじま）の大きな4つの島が中心。海上から一番先に目に飛び込むのが、島全体が削られた岩肌の荒々しい異景を見せる男鹿島。家島群島の一番東にあり、面積 4.37 平方キロメートル、周囲 9.99 キロメートルで、島全体が花こう岩質のため古くから採石業が盛んで全島が採石場。遠くから見るとほかの島々が緑に覆われているのと対照的に、海の中に全島削られた山が迫る異様な風景である。昔、姫路から雄鹿が海を泳ぎ渡った島ということで男鹿島となったと伝えられており、対岸の姫路側には妻鹿の地名が残る。

島からは北に赤穂・姫路から明石へと播磨の海岸線が見通せ、遠く東は明石海峡・淡路島 南に鳴門海峡から四国 西には家島諸島越しに備讃瀬戸と 360 度の海の展望所である。

この島は海の要衝の地で 旧石器時代から人が住みついたと見られ、島の一番高い山頂の上には弥生時代 瀬戸内海 四方を監視していたとみられる高地性集落遺跡があるという。

阪神間芦屋の山裾の高地性集落「会下山遺跡」を調べている時に 「播磨灘にぽっかり浮かぶ家島諸島「男鹿島」の頂上に 360 度瀬戸内海を見渡せる高地性弥生集落があった」と教えてもらった。

以前 高校生だった娘が休みになるとせっせと通った「母と子の島・西島」・坊勢島もこの群島にあり、国生み神話「オノコロ島」伝説のもうひとつの伝承地「コウナイ石」も西島にある。

近くにいながら訪ねたことのない家島群島 調べてみると「交通の便は悪いが、朝早くであれば 男鹿島も行けそう。あわよくば、「コウナイ石」も見に行きたい。」と出かけましたが、私の計画とは裏腹にすごいところでした。

1. 弥生の高地性集落「大山神社遺跡」概要



弥生時代の高地性集落「大山神社遺跡」は家島町男鹿島、標高 210m の山頂部に立地している。この島の頂上部に大山神社があり、その境内一体が遺跡であるが、遺跡からは播磨平野が一望でき、遠く淡路島・四国を眺めることができる。島の人たちは「山の神」と称して昔から信仰。この遺跡からはナイフ形石器が出土していることから、旧石器時代からすでにこの地に人の痕跡がある。そして、弥生時代中期後半になると、高地性集落が営まれ、弥生土器や農具、狩猟具、漁撈具などが出土。その後、中世には池跡などが見つかり、瀬戸内海を往来した物資である中国製の青磁碗や畿内産の瓦器碗などが出土している。



男鹿島 弥生の高地性集落「大山遺跡」から出土した遺物

2006. 8. 4. 姫路市埋蔵文化財センター 展示より

後期旧石器から縄文時代の始まるまでこの頂上部に人のいた痕跡があるが、縄文時代前期以降 この頂上部には人はいず、むしろ海岸部に遺跡が点在。弥生時代中期後半からこの頂上部に高地性集落が出現する。最大 10 棟程度の住居があったと考えられ、竪穴住居や掘立柱建物 土坑などと共に弥生土器・製塩土器 戦闘用の石鏃 農耕具としての石包丁・石斧・楔形石器 漁撈具としての石錘・土錘などがしゅつどしてあり、麓の村と連携



して村が存立していたことがうかがえる。鉄製品も鉄滓・板状鉄器など10数点出土しているが、残念ながら時期は明確でない。



男鹿島 大山神社遺跡 発掘時の写真

「大山神社遺跡」 2006年 家島町教育委員会・岡山理科大学人類学研究室より

播磨灘の中央に浮かぶこの島がちょうど九州から瀬戸内海を通過して畿内に入る入り口にあり、360度瀬戸内海を見渡せる眺望の良さが遺跡を形成した要因の一つと考えられます。瀬戸内で何か変化があればすぐわかり、また、この地で狼煙を上げれば、直ちに四方に連絡がつく要衝の地である。戦乱の弥生時代中期から古墳時代を経て大和が国造りを進めてゆく過程、さらにはその後も瀬戸内の海道の要衝の地として重要な役割を演じたであろう。

男鹿島を訪れてはっきりしたのですが、現在碎石による山の取り崩しが進み、遺跡へは行けない。(島の人们によると「山ノ神」の境内はもう落ちてしまっているという。そして、「山ノ神・大山神社」は山の南東山麓の田の浜の集落に移されている)



現在の男鹿島 頂上部 タテイワ周辺より

2. 家島群島 男鹿島を訪ねて 2006. 8. 1. & 8. 4.

8月1日朝 姫路飾磨港から船に乗れば簡単にゆけると思って飾磨港に行くとも鹿島を経由する船は出たところで、昼まで船はないという。また、船会社の案内所で聞いても遺跡なんか知らないという。それならば 坊勢へ行って、母と子の島(西島)のコウナイ石を見に行こうと話をするも そっちも 現在 西島へは県立母と子の島施設へ行く人だけしか乗せないという。理由は採石場で危ないからだという。母と子の島へ連絡しても同じ答えで、もし行くなれば 坊勢で船を雇えという。出だしから びっくり。昼まで待たねば仕方がないのか……



飾磨港

男鹿島へ行って後でわかったのですが、もう 海岸から奥まで島全体が碎石きり崩されていて、道がなく、海岸を伝って歩くのも採石場の中 大型碎石トラックと碎石の山を縫うように歩かねばならない。西島もコウナイ石の周辺も事情は同じと後で家島役場が運営する群島間の公共連絡船の人が教えてくれた。

採石場の大規模な山崩しは山口県美祢の宇部興産石灰山崩しで知っているつもりでしたが、本当に唖然とすねほどすごいですね。考えて見れば この数十年 関西空港・高速道路網整備・本四架橋そして大阪の最開発と大型プロジェクトが目白押し。都市開発の裏での自然破壊というか地方の犠牲をまざまざと見た感じです。

約10数年前からの大規模碎石採取 この周辺の碎石がみな関西の大規模開発を支えたのだから……。この時はまだ知らなかったのですが、訪ねる大山遺跡も山の頂上から 360度瀬戸内海を見渡す景観も碎石の中に崩されてしまって 行けなくなってしまっていました。



男鹿島 海岸線から山の上まで すべて採石場だった

昼まで 船を待つ覚悟ですぐ隣の埠頭で小さな貨物船が小荷物受付の看板を出して荷物を積み込んでいる。

「どこまでゆくの」と聞くと「坊勢までの生活物資の運搬定期便で男鹿島にも立ち寄る」という。

「男鹿島まで乗せて」と頼んで 軽トラで食料品を男鹿島まで届けに行く人の助手席に乗せてもらって、男鹿島へ。



飾磨港で家島群島への物資輸送の定期便に載せてもらう 2006. 8. 1.

考えてみれば 無謀なんです、島のどこに着くかもわからずです。

「男鹿島の一番山の頂上 瀬戸内海を360度見晴らす場所があるのでそこへゆく」というと みんな寄ってきて、「道なんてないよ・・・歩くの??」とさも珍しそう。

「灯台の一番高いところで おろしてやれば・・・俺の車 海岸にほってあるから それのって行けよ」といろいろ教えてくれる。「車貸すって・・・」とそのときは気にも留めなかったのですが・・・



播磨灘の中央から 赤穂・相生・姫路の海岸線を見る 新日鉄広畑の煙が遠く見える 2006. 8. 1.



姫路の海岸 新日鉄広畑



男鹿島

晴れてはいるのですが、かすんでいて 遠くの景色がかすんで見えるのですが、海岸線の煙突の煙だけが鮮やかに見える。明石海峡が見えるときがあるというのですが、肉眼では確認できず。

飾磨から20分ほどで前面岩肌をさらした男鹿島が見えてくる。周りの島がみんな緑にかすんでいるので、本当に異様である。あの島影の右のところはどうも頂上 あそこにかつて 弥生時代 「戦さ」に備えた瀬戸内海を見下ろす集落があった。かつてはそうでなかったでしょうが、その姿は海に浮かぶ要塞そのものの感じである。

どんどん 島が大きくなってきて、島の東側にすこし回りこんだ海岸に進んでゆく。

見えるのは 岩肌をさらけ出した断崖を背に採石場のみ。採石場の荷降場みたいところに船が着いて、私を乗せてくれた軽トラ一台だけが降りて、船が離れてゆく。ひっそりとしていて 誰もいない。

電話で注文を受けて軽トラで採石場をめぐりながらその事務所などに荷を届けるのだという。



男鹿島 北側海岸 青井浜周辺の採石場棧橋から上陸

2006. 8. 1.

道はあるようでなし。通れることは通れるのですが、それこそ曲がりくねった凸凹の工事現場の中を海岸線に沿って中に入ったり、海岸に出たり。すさまじい。すぐそばに削りとられた崖 砕石の山が並ぶ。



青井浜を越えて東側海岸沿いを南に回りこむ 採石場の中のドライブ 2006. 8. 1.

何度か砕石場の事務所に止まって、海岸から灯台への尾根越えの道に入り、その頂上でおろしてもらおう。

「気をつけて行きや 峠を降りたら 集落。 道はこんな状態だけど 採石場を縫ってゆけば 連絡船の港へ出れる」と峠を下ってゆく。

一服して コピーしてきた地図を広げて場所を確認する。地図といっても島の輪郭線があって 島の頂上への道が点々で 3 本ほど書いてあるだけである。来る時に青井浜の小さな集落通ってきて、灯台の位置がわかるので場所がわかる。

灯台へ行ったが 樹木の中で あまり周囲がよく見えない。

わずかに乗せてもらった軽トラが超えていった西側が見え小さな集落 田の浜が見える。ちょうど島の南海岸である。



男鹿島の地図と 海岸の WALK ルート図
結局 8. 1. と 8. 4. と二回歩きました



灯台から西側 田の浜から採石場に占有された大崎

峠に戻って 西や北の山並みを見るが、ここからは頂上部への道がない。 峠から島の頂上の方へ道があるが、少し登った給水塔のところまで終わり。

田の浜には「山ノ神」を降ろして大山神社が移されていると教えてもらったので、一旦田の浜へ

下る。途中登る道があれば登ってゆこう・・・と。

頂上部近く山の斜面を切った道が見え隠れするのですが、どうもゆけない。道を探しながら結局 田の浜の海岸 廃校跡まで来てしまいました。



峠から南の灯台



峠から西側の山並みと下り道

田の浜は湾になっていて砂浜が広がり、反対側の北側はちょうどコの字型に島中の中央の山から尾根が張り出し海

に落ちている。東が灯台のある尾根で西の尾根は採石場になっている。湾の奥に少し平地があり、10軒足らずの家がある。しかし、まったく人影がない。湾から見上げる奥の山ここには緑があり、山の裏側そしてコの字型の尾根の反対側から、採石場が迫っている。この集落の少し奥まったところに大山神社が移設されていた。



田の浜の集落 移設された大山神社周辺 2006. 8. 1.



廃校跡

移設された大山神社

田の浜

よく晴れていて田ノ浜の海の向こうには鳴門・四国が見えるはずであるが、よく見えませんでした。この集落から島の頂上部へ登ってゆく道があるはずと大山神社周辺をあちこち歩くのですが、道はなし。立派な神社が建てられているが、神社にも人はいない。集落の奥がちょうど谷になっていて、山々の中腹部に砂防堤が見えていて、その上の方が島の頂上部で、この谷を入れてゆくのだろうか・・・



田の浜から北側 島の頂上部周辺

浜からまっすぐ海岸を採石場に行く道とT字で奥の谷へ入って峠越えで池の浜へゆく道がある。この峠が地蔵峠でここからも地図では点々の道があるので、峠越えで池の浜 連絡船のあるタテノ浜の方へ向かう。神社の横を小川に沿って奥へ入ってゆく。

何度か車を見かけたのですが、また1台車が追い抜いてゆく。やっぱりナンバープレートがついていない。朝から気になっていたのですが、走っている車にもナンバープレートがない。まあ採石場の中を走るようなものなので、いい車を持ってきてもダメとは思っていましたが・・・ ナンバープレートがないということはこの島全体が私有地。朝 乗せてくれた船の人が「俺の車もおいてあるから、乗っていけ」の意味やっとわかりました。



島の中はバックナンバーなしの車が現役で交通手段として使われている 2006. 8. 1.

浜から10分ほど奥へ入ったところで道は西に曲がり西の尾根を越えて池の浜への道になる。この周辺にも数戸の家があり、やっと人影を見つけて飛び込む。地図のコピーを見せながら田ノ浜から頂上部への道を聞くが、「知らぬ」という。直角に道が曲がるあたりからそのまま小川沿いに伸びる小道があり、入ってみるが、もう廃道で先へ進めぬ。やっぱりここもダメか・・・

あきらめて 元の道に引き返し、尾根の上に登ってゆく。15 分ほどで尾根の上
地蔵峠に出る。峠にはお地蔵様が祭られ、木々越しに池之浜の海岸といっても採
石場 振り返ると田の浜側の山々が見える。田の浜からは一面緑しか見えませ
んでしたが、山と山の間に切り崩された岩肌が見える。

やっぱり、もう集落のある裏山部分を残して 島全周にわたって海岸から中央頂
上部まで切り崩されているとわかった。

ここからも島の頂上への小道の入り口があったが、やっぱり廃道である。ブッシ
ュに覆われ 進めない。



池の浜&家島遠望



地蔵様を祭る祠



田の浜側 島の頂上部

地蔵峠からの東西の眺め 2006. 8. 1.

田の浜から 30 分ほどで、地蔵峠を越えて 池の浜に出る。 ここもすごいスケールの採石場が海岸から山頂まで
広がっている。



池の浜から連絡船の着く男鹿・タテノ浜までは島の中央部の断崖を見ながらの採石場歩き 2006. 8. 1.

ここから 連絡船の着く男鹿・タテノハマまで島の西海岸を浜伝いに採石場歩きが続く。海には家島がすぐ実の
前にあり、坊勢・西島がその後ろにかすんでいる。反対の陸地側は幾段にも切り開かれた採石場の奥に島の頂上
部 垂直に切り落とされた崖が見えている。 採石場の奥と海岸部の碎石置き場や棧橋の間をひっきりなしに大
型の碎石運搬車が通るので 気を張って 採石場を歩かないと危なくて仕方がない。

頂上部の遺跡周辺を眺めている余裕なし。

人が立っているたびに「あの頂上部にゆけないか・・・」と聞くのですが、働いている人は外から来ているか
らかもしれないが、「知らない」という。「乗用車のわだちを見つけながら 海岸部歩けば 船着場にいける」と
親切に教えてくれる。

船の時間 夕方までたっぷりあるし、家島を見ながらの採石場歩き。

何か渡船を見つけて 向かいの家島に渡って、家島支所によって 資料と大山神社遺跡への道確かめよう。
人に出会うことが少ないので、資料なしで頂上部に行くのは難しいとつくづく思う

島の北側に回ってきたので、どれほど播磨灘がみえるか・・・と海に目を凝らす。



池ノ浜からタテノ浜への海岸沿い 播磨灘に目を凝らす 2006. 8. 1.



水平線のかなた 新日鉄広畑の煙が見える 写真中央

水平線を行く小さな船影の向こうにうっすらと播磨の海岸線の山々がかすんでいる。

その中に うっすら垂直に立ち上る煙が視認できる。

どうも 新日鉄広畑の煙突の煙である。

ほとんどみえない状況でも白煙がみえるのは驚き。

やっぱり、狼煙は古代からすごい伝達手段であったろうと認識する。

田ノ浜からあっちへよったり、道草を食いながら約2時間ほどでタテノ浜。 ここが島では一番大きな集落で海水浴場が開設され、民宿や海水浴相手の店が狭い海岸沿いに並んでいる。姫路や坊勢からの船もここに着く。

ここに航路を持つ船会社がひとつつぶれたので、余計に不便になっている。船着場で海を見ながら時間つぶしと昼寝をしていると、若いお嬢さんがこの桟橋へ。

「姫路に帰るのだけれども ここから どこかに行く船あるのですか・・・」と聞くと「2時過ぎに姫路 家島どちらにも船がある」という。びっくりして 飛び起きて 通常の航路にはないのに・・・と半信半疑だったが、きれいな船がやってきた。姫路と合併して家島町はもうなくなっているのですが、暫定的に旧家島町の役場がある家島と島々を結ぶ公共交通あり、男鹿島と家島を結ぶ船で、先ほどのお嬢さんと2人 貸切みたいなもの。と

船の人に聞いても「もう10年ほど前 「山ノ神」を麓に下ろしたから 頂上への道どうなっているか・・・」という。西島のコウナイ石も前に聞いたのと同じ答え。「案内者つけないと厳しい」という。

無料で15分ほどで向かいの家島の役場の前まで降ろしてくれた。



家島町の船で 向かいの家島へ

家島は家島群島の中心地で 島の湾の両側に家がびっしり詰まっている。また、この湾の中には数多くの碎石運搬船が停泊。漁港であると共に、運搬船の基地である。



家島湾と湾の両岸にぎっしり並ぶ家並み

棧橋のすぐ前に家島支所と公民館が並んでいる。家島支所で連絡とってもらって、資料を見せてもらいに公民館に行く。ここでも「山ノ神」に行くのは難しいという。男鹿島でもそうでしたが、みんな土地の人は「大山神社」といわず、「山ノ神」という。このあたりの人々が、海のどこからも見える男鹿山の頂上に強い信仰の念を持ち続けてきたことがよくわかる。

公民館で目的を告げると「大山神社遺跡」という立派な調査報告書を出してもらって、熱心に読ませていただいた。ずっと歩きながら不安であった「大山神社の位置」「高地性集落としての遺構と平地の村」「遺物 特に鉄が出ていないか・・・」など調査報告書を30分以上眺めていました。

大部なので部分的にコピーをお願いすると「研究目的だったら・・・」と一部いただけることになって、本当に感謝です。この大山神社遺跡周辺には旧石器・縄文時代から人が住んでいたことそれが一旦弥生時代に麓の集落に降りてまた「戦い」の備えとしてこの山の頂上に人が住んだと・・・。

また中世の遺物として、瀬戸内海を往来した物資である中国製の青磁碗や畿内産の瓦器碗などが出土している。

やっぱり古代からの瀬戸内海「海道」の要衝として重要な役割を果たしたことが明らかである。

夕方 資料をリュックに入れて、高速船で 男鹿島を見ながら姫路へ



家島から姫路への高速船から見た男鹿島

それにしても 360度瀬戸内を見晴らせる頂上に立てなかったのは残念。すばらしい資料ももらったし、島の北側 採石場側からの道の探査も住んでいないし、資料をよく読んでもう一度再挑戦しよう・・・と。

● 8月4日男鹿島 頂上目指して 再挑戦

8月4日朝一番の船でタテノ浜・男鹿に到着。

「本当に頂上へ行けないのか・・・」あわよくば 頂上に立ちたい・・・と。

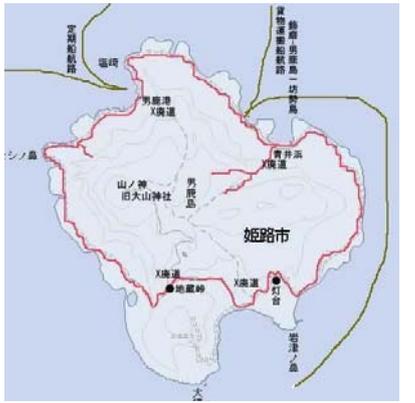
前回島を一周しているので様子はわかっている。集落はこのタテノ浜と青井浜・田ノ浜しかなく、そこから以前は道が頂上に向かってついていた。今回は 集落で聞きながら 道探そう・・・と。

まず、船着場にいた古老に尋ねると「ここからの道はもう 大分前からない。神社は裏側の麓。もし 行くとしたら 青井浜までの採石場を登って行ったら 行けるかもしれない。」と。

採石場では「もう 10年も前に「山ノ神」の周辺は切れ落ちたよ。ロープでも持って よじ登らないと道はない。俺はここの人間やから 上に道あるように見えるがそこへ行く道がない」と。

青井の浜の古老は「青井の浜からの道も 地蔵峠からの道ももうないよ。 それこそ 垂直の崖をロープでよじ登らないと・・・ 本当に行くのやったら、後で搜索願だしといたる」と。

みんな行く先々で ダメといわれながら ついにまた 島を一周歩きました。





男鹿島 弥生の高地性集落「大山神社遺跡」のあった島の頂上部

3. まとめ 弥生の集落遺跡「大山神社遺跡」を訪ねて 男鹿島 Walk

大山神社遺跡

家島町男鹿島、標高210mの山頂部に立地しています。遺跡からは播磨平野が一望でき、遠く淡路島・四国を眺めることができます。こうした眺望の良さが遺跡を形成した要因の一つであると考えられます。

ナイフ形石器が出土していることから、遺跡が旧石器時代の狩人たちにとって、狩猟に適した場所であったと考えられます。また弥生時代中期後半になると、高地性集落が営まれ、弥生土器や農具、狩猟具、漁撈具などが出土しています。中世には油跡などが見つかっており、瀬戸内海を往来した物資である、中国製の青磁碗や畿内産の瓦器碗などが出土しています。



播磨灘の真ん中に浮かぶ男鹿島。この島の中央の頂上からは360度瀬戸内海を見晴らせる場所。そこに弥生の高地性集落が存在すると聞いて、360度瀬戸内海が見晴らしに行こうと軽い気持ちで出かけましたが、結局目的は果たせず、すごい場所でした。

島はここ 20 年にわたる関西のインフラ整備を支えた砕石の島。緑の島全体が丸裸の採石場に。山も道も海岸もすべてが砕石になり、海から見ると垂直に切り裂かれた断崖がまるで 岩のとりでのごとく海に浮かんでいる。

環境破壊の最たるものであるが、それが関西を支えた。今時 ナンバープレートのない車が自由に走り回れる所があるなど 本当に驚きでした。

おそらく昔は緑の島の海岸沿いに幾つも集落があり、どこからでも見える島の頂上

に「山の神」が祭られ、周囲の村から「山の神」への道がついていた。この島全体が花崗岩の島で島の海岸から山の上までどこからでも砕石が取れる島であったことしかも海路ですぐに大阪に行ける。

このことが、この島を砕石一辺倒の島にかえたのだろう。集落も道も山も海岸線もみな採石場となり、わずか 3 つほどの小さな集落が海岸にへばりつき、砕石に関係しないと生活できない島になっている。

海岸から山の頂上へ向かって砕石採取が猛烈ないきおいで進んだのだろう。約 10 年前に四方から頂上「山ノ神」への道も切り崩されてなくなり、頂上部の「山ノ神 大山神社」も麓に下ろされると共に、頂上周辺も崖にとざされ、危なくて行けないところになってしまったという。したがって 360 度瀬戸内海が見晴らせ 弥生時代の高地性集落があったという頂上部へは行けなくなってしまいました。

関西の犠牲になった島といえないこともない。2 日にわたって 頂上へ行く道を求めて、海岸を 2 周しましたが、海を眺めながらの採石場めぐりでした。

後は 島をめぐりながら 海路はるかを遠視しながら、昔を創造せねば・・・でした。

相生・姫路の播磨の海岸線 明石海峡・淡路島 鳴門海峡から四国 小豆島 どこまで見えるのか???

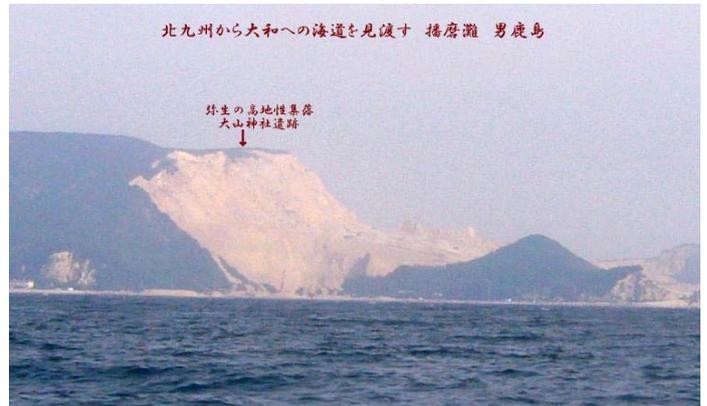
興味津々でしたが、2 日とも快晴の暑い日でしたが、遠く見る水平線・島影はかすんでいて、クリアにそれぞれを認識することは出来ませんでした。しかし、水平線の向こうに見えるか見えないか かすかな播磨の山並みにまっすぐ立ちのぼる煙突の煙が見えました。まわりがほとんど視認できない中 煙だけははっきり見えるのにはびっくり。やっぱり 狼煙は通信手段としてすごい手段。

この男鹿島の頂上の弥生の高地性集落の一番高いところにも烽火台の跡が見つかっている。

麓の集落のみならず、海に出ている人々 海路はるか播磨 淡路 四国の村々にも連絡を取っていたに違いない。

頂上に立てませんでした。島をめぐって 360 度瀬戸内海の景色を見れるところは ここしかなし。すばらしい景色と採石場を余すところなく見ることが出来て おもしろい Walk が楽しめました。

でも 遠ざかる男鹿島の均整の取れたというと怒られるかもしれませんが、島の頂上部を形成する山並みを見ると やっぱり 山の上に立てば どんなにすばしいか・・・と恨めしくもありました。



頂上部にあった弥生の高地性集落「大山神社遺跡」については家島町・岡山大学の立派な調査報告書が出ており、その報告と walk とを重ねながら想像するしか仕方がない。

旧石器時代の遺跡というと遠く 関東・秩父・東北の世界とって いていましたが、この男鹿島の頂上部から旧石器時代のナイフ状石器や縄文の石器も続々。そして 弥生の石器も・・・・。

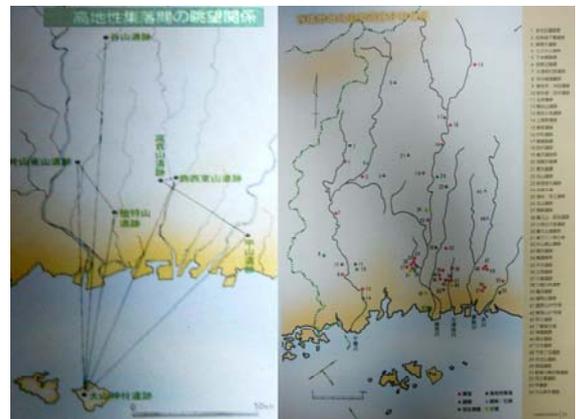
その精密なつくりに驚かされる。ちょうど姫路埋蔵文化財センターで大山神社遺跡の出土品が一部展示されていて その現物を見ることが出来ました。また この遺跡からは 10 数点の鉄片や鉄滓などが 見つっているが、詳細は不明である。

旧石器から縄文時代 頂上部は狩猟場として都合がよかったの だろう。弥生時代になると一旦頂上部から人の痕跡は消え、海岸部に いくつかの集落が出来る。そして弥生の中期 再び この山上に麓の集落と連携して高地性集落が現れる。その数 6 から 10 軒の竪穴住居と掘っ立て柱建物 そして一番高台に烽火台があっ た。

おそらく周辺の「戦さ」への備えだったのだろう。そして、国がまとまっ てゆく古墳時代になるとまた、人の痕跡は消え、中世にまた、人が住む。この 360 度瀬戸内海を見晴らせるという地の利がこの島の頂上部に戦乱の備えとして人を住ませたのだろう。



播磨灘の真ん中であって、要塞のような均整の取れた台形の島の頂上部に立てば、四方は我が手に在り といった気分にもなったろう。畿内の入り口にあって、本当に重要な場所だったろう。



男鹿島からの烽火が視認できると考えられる播磨の集落



男鹿島 大山神社遺跡 発掘時の写真